

2015年入学式 式辞

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

そして、これまで新入生を支えてこられましたご家族や、関係者のみなさまに、心よりお祝いを申し上げます。

新入生のみなさんは、今日から、予め決められたものを学ぶ生徒と呼ばれる存在から、何を学ぶべきかを主体的に考える学生という存在になりました。同時に、世界をより善くするための義務を負ったと言えるかもしれません。高等教育を受けられる若者の数は、性差や地域や階層などによって著しく偏っており、世界全体では、信じられないほど少ないからです。

人間は自分以外の誰かが幸せになることを通じて幸福感を得ることが最近の脳科学などによっても証拠づけられています。共感のないところに幸せはありません。

他者の痛みを自分のものとして感じることができなければ、本当の意味での幸福を手に入れることはできないのです。本学が「ここを育てる」大学を標榜する意味もそこにあります。

「ここを育てる」の主語は大学ではなく、みなさんが自身です。その育てるべき「ここ」には、思考力や情操だけでなく、psychologyの語源であるギリシャ語、プシュケが意味する生命の原理のようなものも含まれているかも知れません。「ここ」と対をなすことばは「かたち」です。かたちは目に見えますが、ここは目にみえません。「大切なものは、目に見えない」のです。「ここを育てる」には、まず、目にみえないものにここを向けねばなりません。

本学図書館棟の外壁には SURSUM CORDAの文字が刻まれています。これは「ここを高くあげよう」という意味のラテン語です。高みを見るというのは、上昇志向のようなものを意味するものではありません。しっかり、大地を踏みしめて、人間を超えた存在へ静かにここを向けることを意味しています。そうすることで、目に見えない大切なものが、小さな子どもたちや、いつも目立たず片隅にいる人たち、立場の弱い人たちとともにあることが分かるはずです。大学で学ぶということは、与えられる知識をただ受け取ることはありません。書物に書かれていることや教師のことを鵜のみにせず、批判的に吟味し、自らの頭で考え、行動しなければ、学んだことにはなりません。大学や短大での学びは、100円を出せば、必ず100円の価値のものが手に入れられるといった等価交換のシステムではありません。これからの二年間、四年間で、何を受け取るかは、各自の学びの姿勢によって決まるのです。学びの場は決して教室やキャンパスの中だけではありません。様々な現場に足を運び、そこに生きる様々な人々と交わる体験があなた方をより進んだ学びへと誘うはずです。

不安なこともあるでしょうが、心配はいりません。F館校舎の壁面には、もうひとつのラテン語のことば、DOMINUS TECUMが刻まれています。

アヴェマリアの祈りに出るこの言葉は、「主はあなたとともにおられる」という意味ですが、いまのところは、難しく考えず、「誰かがきっと見てくれている」と思えばよいのではないかと思います。どんな時であっても、あなたは決して、一人ぼっちの身捨てられた存在ではあり得ないということです。

今日の佳き日に、清泉女学院大学・短期大学が大切にまもりつづけて来た二つの句 SURSUM CORDAとDOMINUS TECUMを新入生のみなさんに贈り、学長からの歓迎のことばの結びといたします。